

広島藩大坂蔵屋敷跡

—大阪市北区中之島4丁目における発掘調査—



1997. 3

財団法人 大阪市文化財協会

目 次

1 発掘調査の経緯	1
2 調査の成果	2
1) 船入を埋める土の堆積状態	6
2) 船入のようす	6
3) 蔵のようす	14
4) 船入から出土した遺物	16
3 新出の絵図と船入の変遷	23
4 まとめにかえて	24

例 言

- 一、本書は大阪市北区中之島4丁目(大阪大学医学部跡地)に計画されている大阪市立近代美術館(仮称)予定地内で実施した広島藩蔵屋敷跡の発掘調査概要である。
- 一、1995年12月に遺跡の遺存状態をつかむため試掘調査(久保和士担当)を実施し、1996年5月から10月まで専門調査役永島暉臣愼を責任者として、約600㎡の発掘調査(伊藤 純担当)を行った。
- 一、調査費用は全て大阪市教育委員会が負担した。
- 一、表紙・写真2・4は徳永閑治氏、写真10～15・裏表紙は楠本真紀子氏、写真16・17は大島邦夫氏、写真18は久保和士によるものである。
- 一、写真16「大坂中ノ島御屋敷絵図」・写真17「大坂浜之御屋鋪絵図」の公刊にあたって、所蔵者である広島市立中央図書館の特別の許可を頂いた。
- 一、発掘調査と整理作業には補助員三宅洋子・上原郁代が参加し、資料調査にあたっては藤戸憲朗・池本公二・西村 晃の諸氏、木簡の釈読は当協会鳥居信子の助力を得た。
- 一、測量に用いた標高はT.P.値(東京湾平均海面値)である。
- 一、本書の編集は伊藤 純があたった。

1 発掘調査の経緯

大川の河口に形成された中洲、堂島川と土佐堀川に挟まれた中之島は“天下の台所”の中心地である。ここ北区中之島4丁目、大阪大学医学部跡地が大阪市立近代美術館(仮称)の建設候補地となった。中之島周辺には全国の諸大名らが蔵屋敷を構え、近世日本の物流・経済の中心となっていた。近代美術館の予定地は安芸広島藩の蔵屋敷跡であり、道路を挟んで東側は鳥取藩、西に隣接して久留米藩の蔵屋敷がおかれていた(図3)。

広島藩の蔵屋敷については、1866(慶応2)年の詳細な絵図(図2)が知られており[佐古慶三1964・岡本良一1976]、北に流れる堂島川から屋敷内に水を引き入れた船入が描かれている。このため、地下に残る蔵屋敷跡の遺構を把握するため、1995年12月に今回のA区に含まれる一部を試掘調査した。この結果、1866年の絵図に描かれる船入の石垣と、さらにこれよりも古い時期の石垣が存在していることが判明した。

この結果をふまえ、船入の遺存状態をより具体的に知るため、絵図をもとに調査区を設定し、1996年5月から9月まで発掘調査を行った。

調査に着手する以前から新聞(1996.3.4付読売新聞夕刊)で報道されていたこともあり、

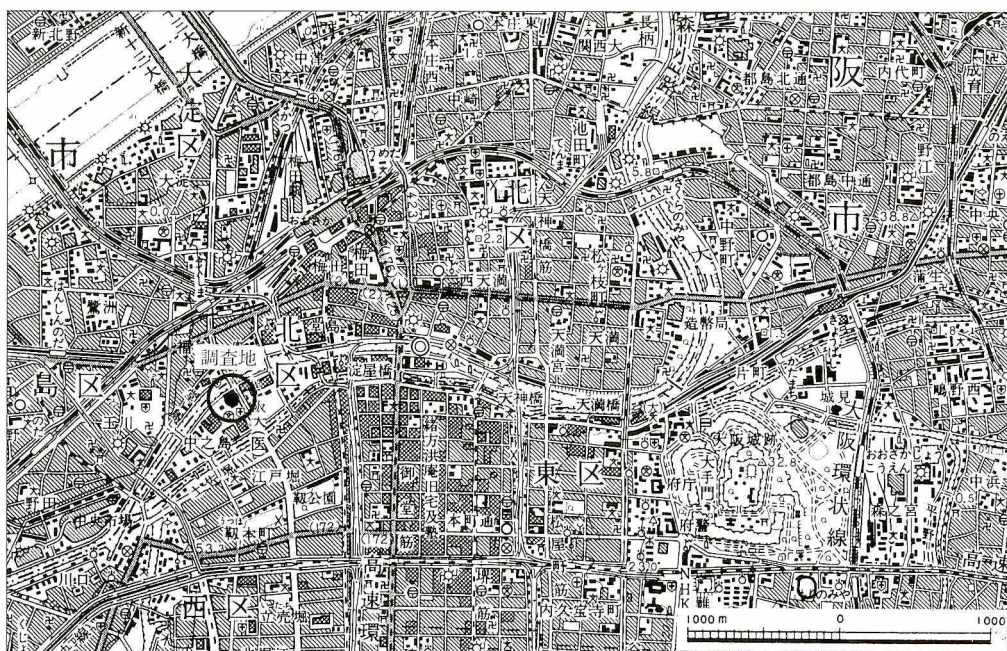


図1 調査地位置図(大阪西北部／東北部)

発掘中も市民の関心は高く、多くの見学者が訪れた。8月3日(土)に現地説明を行い、約200名の参加者があった。

2 調査の成果

船入の規模と遺存状態をできる限り知るため、試掘調査で確認された石垣と絵図とを重ね合わせ、船入の入口部分をおさえるためにA区を設定した。また、船入の北東隅と南辺・東辺の位置をおさえるためにB・C・D区を設定した。

さらに、船入だけでなく地上部分の遺構の状況をつかむため、蔵が描かれている部分E区も調査した。

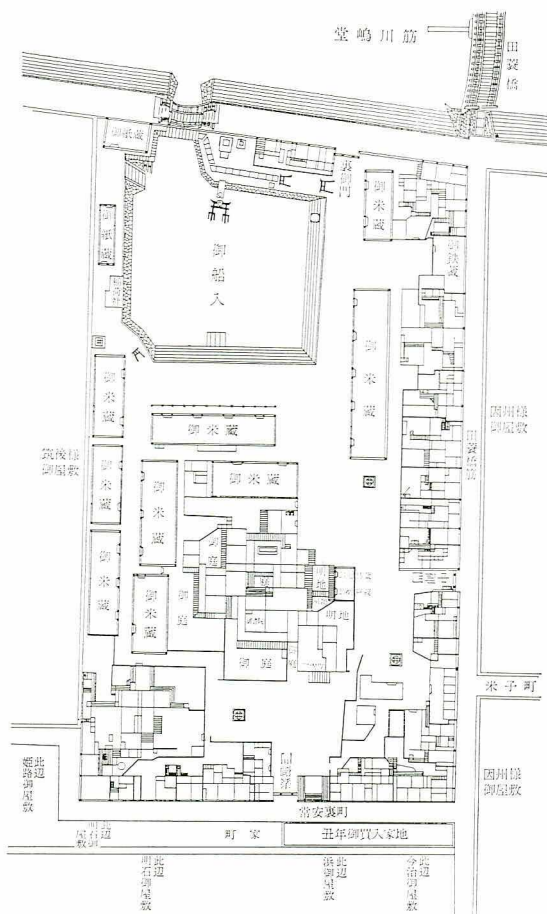


図2 芸州大坂御屋敷全図 [広島県1981]より

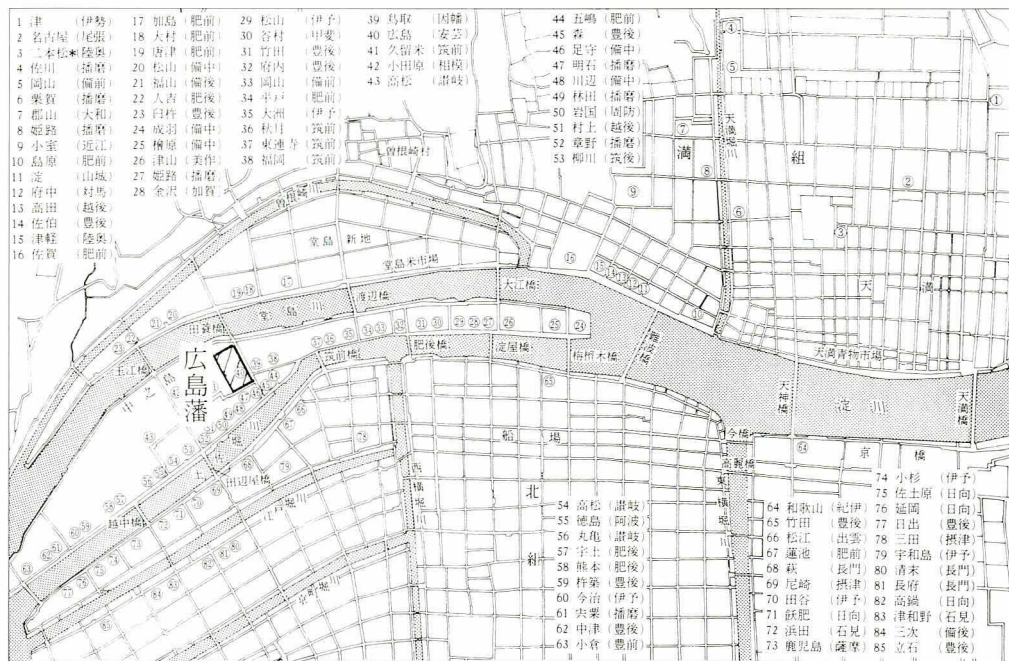


図3 蔵屋敷分布図(『新修大阪市史』3 1989より)

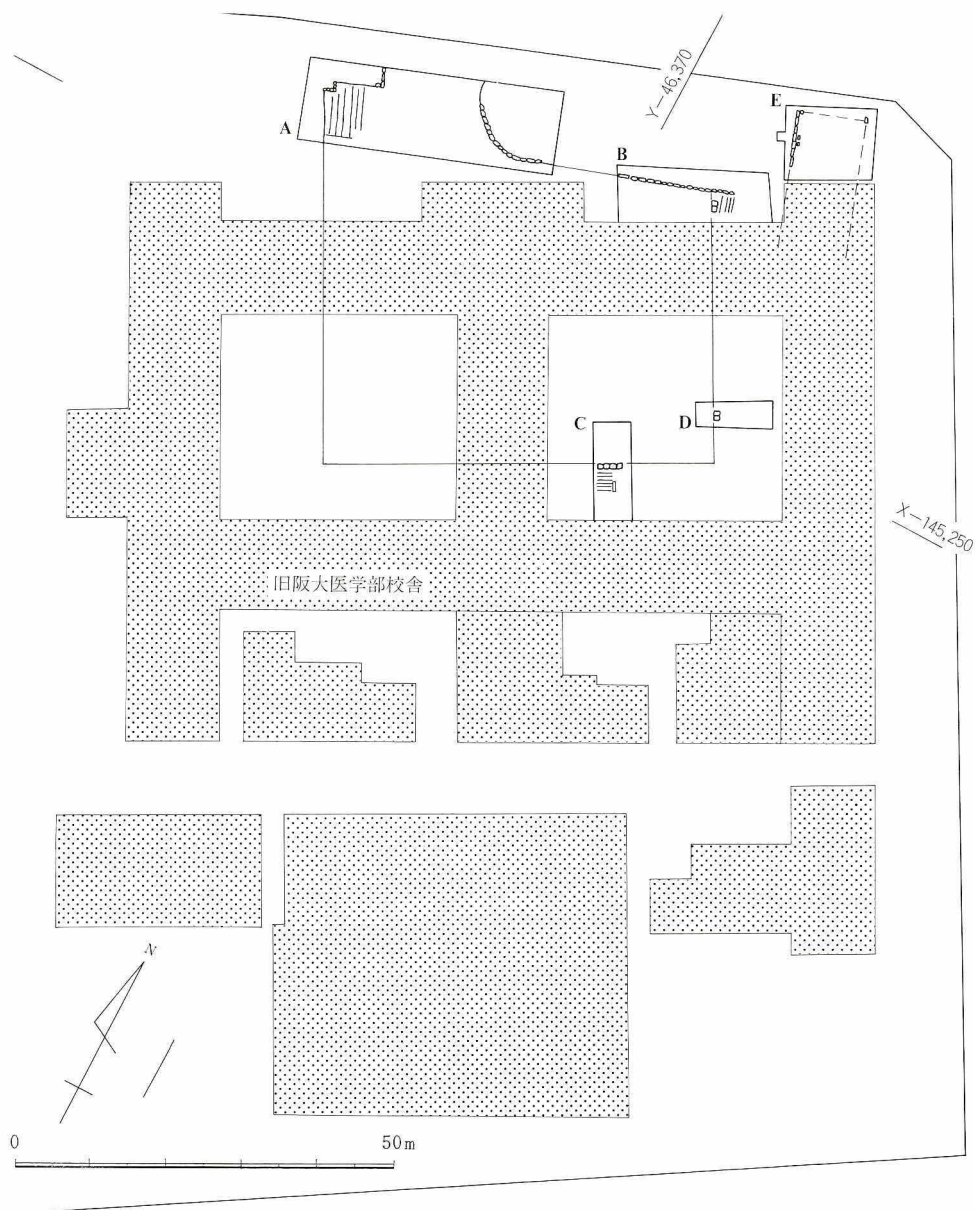


図4 調査地全体図

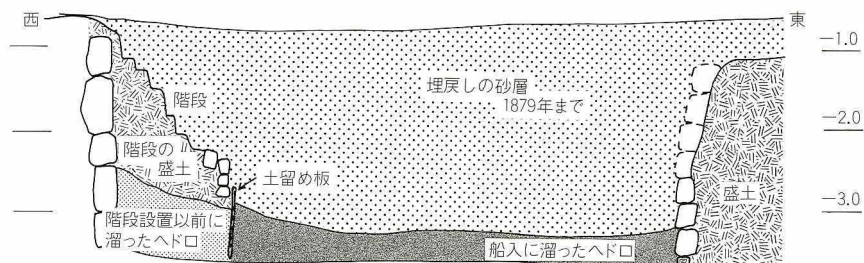


図5 A区東西方向土層模式図



写真1 A区全景(南西から)
西岸の石垣と階段のようす。
手前の石垣と向こう側の石垣との
間は約12mある。ここを通過して
船が出入りする。

写真2 西側石垣(東から)
3 m近い高さが残ってい
た。西岸の石垣は1辺60～
80cm程の石を積み上げてい
る。最下段の石の下には胴
木はなく、そのまま第1石
を据えている。



写真3 A区東岸(東から)
北から南へ円弧を描く石垣
が東へ向きを変え、東西方
向に延びる部分である。



写真4 東岸石垣(西から)
西岸の石垣は東岸に比べ残
りが悪い。最下段の石の下
には胴木が据えられてい
る。この木には桝穴やハツ
リがあり、転用材であるこ
とがわかる。



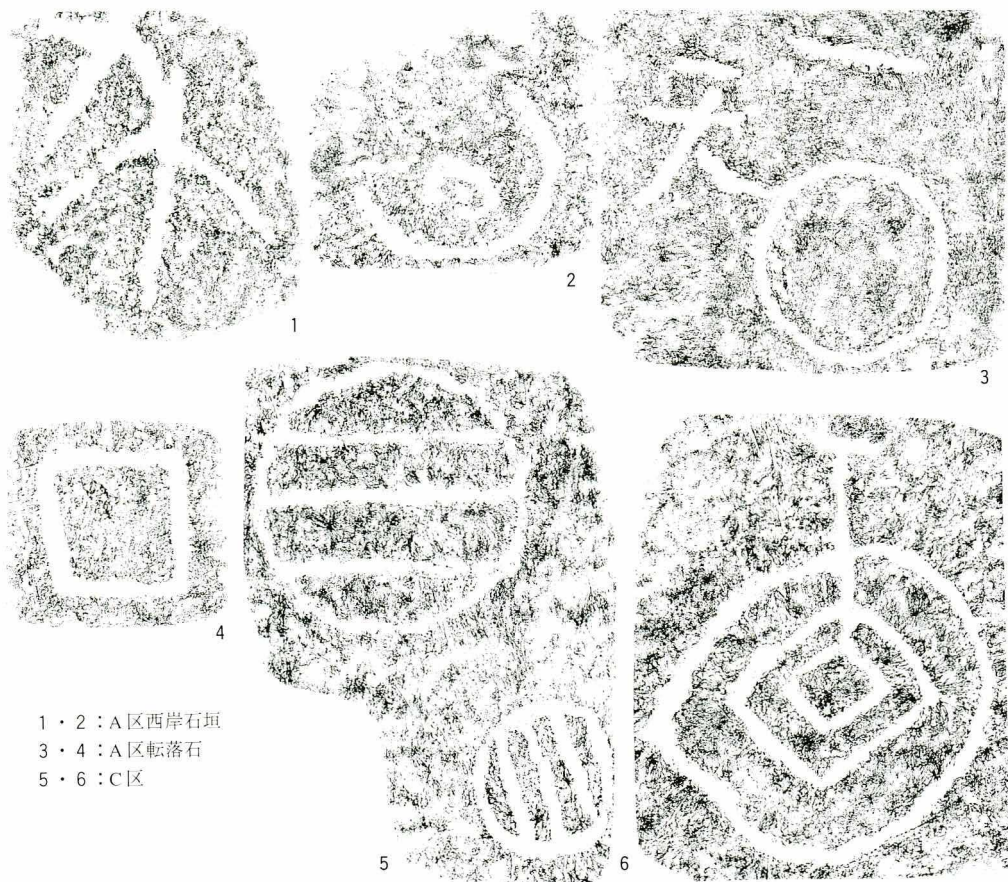


図6 刻印拓影(約1/6)

1) 船入を埋める土の堆積状態(図5)

船入が機能していた時に流れ込んだヘドロが底から40～50cm程溜っている。その上層は、1869(明治2)年の版籍奉還以降、1879(明治12)年に府立大阪病院(現阪大病院)が新築移転して来るまでの間に船入を埋戻すために運ばれた砂である。

遺物の多くは船入内に溜ったヘドロ層と、船入を埋める砂層の境目から出土しており、船入が廃絶した直後に流れ込んだか、棄てられたものであろう。

2) 船入のようす

A区(写真1～4)

西岸は最も残りが良く、3m近い高さの石垣が残っていた。船通から内堀に広がる北西の隅は階段となっている。階段の下の水際には丸太杭が打ち込まれ、栈橋が付設されてい



写真5 A・B区全景(東から)

たことが判る。西岸石垣の下には胴木はなく、直接石を据えている。

東岸は1 m程の高さしか残っていなかった。石の大きさは最下段のいくつかを除いて、西岸のものよりひと回り小さい。最下段の石の下には角材(転用材)を胴木として置いた上に石を積んでいる。東岸の一部が確認できた試掘調査によれば(図12 上段)、今回見つかった円弧状の石垣が巡る東岸全体が、それまで船入の内側であった所に土を入れ、石垣の形状を変えている部分であることから、船入の内側の軟弱な地盤に新たに石を据えるために胴木を用いて石が沈むのを防いだのであろう。

石垣に残るシミや階段の前面に打ち込まれた丸太の腐食している位置から、当時の水面の高さは底から0.8m前後であったと推定できる。

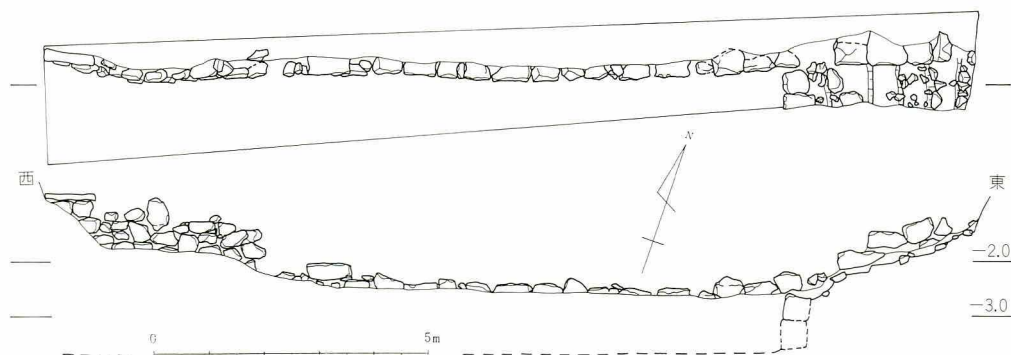


図7 B区石垣実測図



写真6 B区石垣(南から)

B区(図7・写真6)

A区東岸の石垣の延長、すなわち船入北辺の石垣のようすと、南へ折れ曲がる北東隅をおさえることができた。

北辺の石垣には雁木や階段はなく、絵図のとおりである。A区東岸の石と同じく西岸の石材に比べてやや小ぶりの石である。調査区の西端できれいに成形された切石が石垣の最上段に据えられていた。切石の上面はTP-0.8m、A区でおさえられた石垣の底が約TP-4mであることから、石垣の本来の高さは約3.2mであったことが判る。

船入の東辺石垣の上半は雁木となっている。

C区(図8・写真7)

旧校舎の中庭に設定した調査区で船入の南辺をおさえた。

予想される南辺の中央よりやや

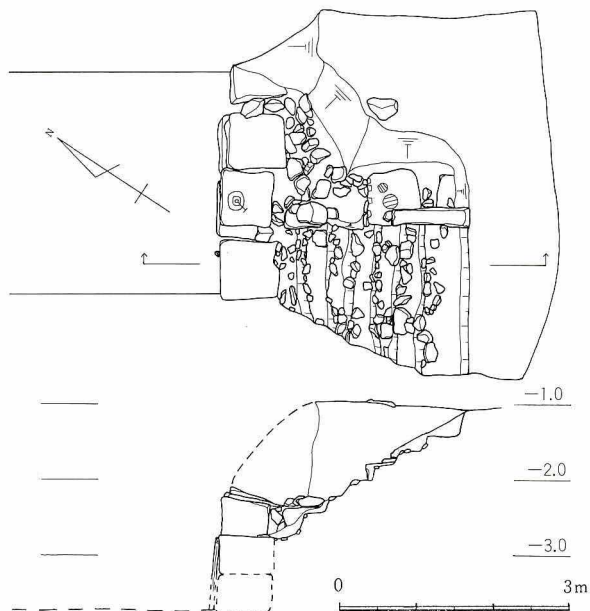


図8 C区石垣実測図



写真7 C区石垣(北から)



写真8 蔵の礎石



写真9 E区礎石列(南から)

東側にあたる。中央寄りには階段があり、階段の東端には耳石が据えられている。階段の下には一辺70～80cmの方形の石が少なくとも3段以上垂直に重ねられている。

D区

攪乱のため残りは良くなかったがB区・C区と同じく、やはり上半は階段状になっており、下半は方形の石を垂直に積んでいるようである。

A・B・C・D区の状態から、北辺の石垣は底から一直線に積上げられており、上面にはきれいに加工された切石を据えており、東辺は70～80cm大の方形の石を底から3段ほど垂直に積み上げ、その上は5～6段の雁木となっていたようである。南辺は中央部分が雁木となっていたようである。

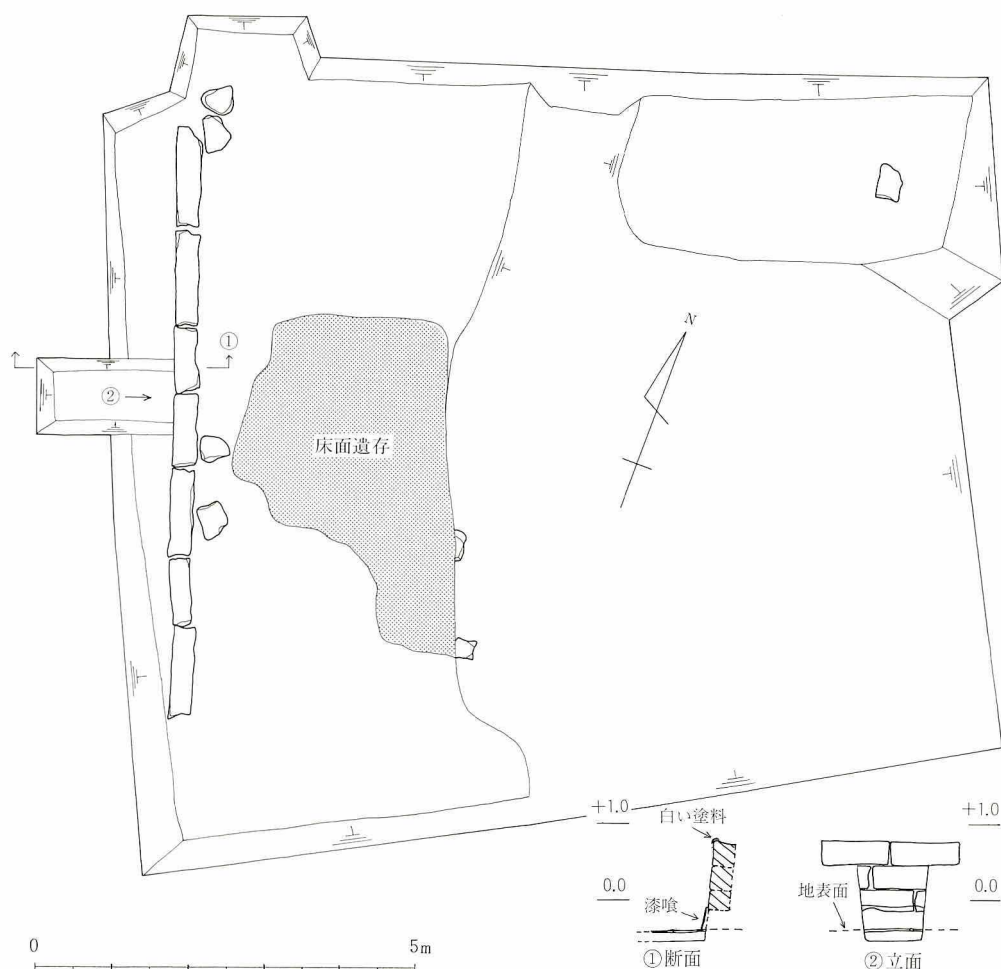
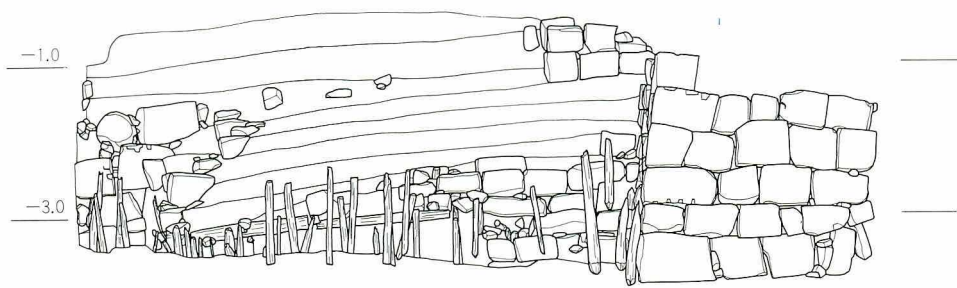
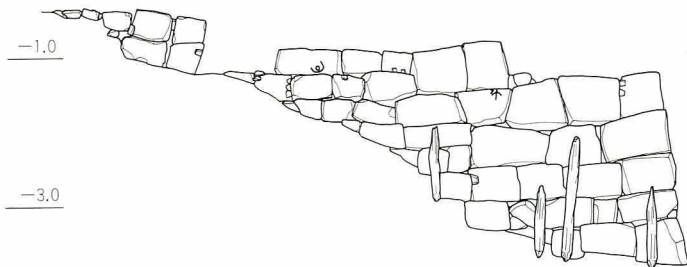


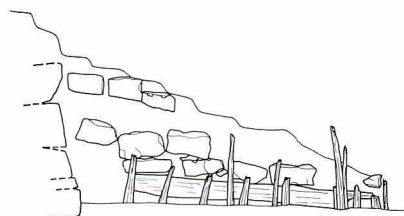
図9 E区礎石実測図



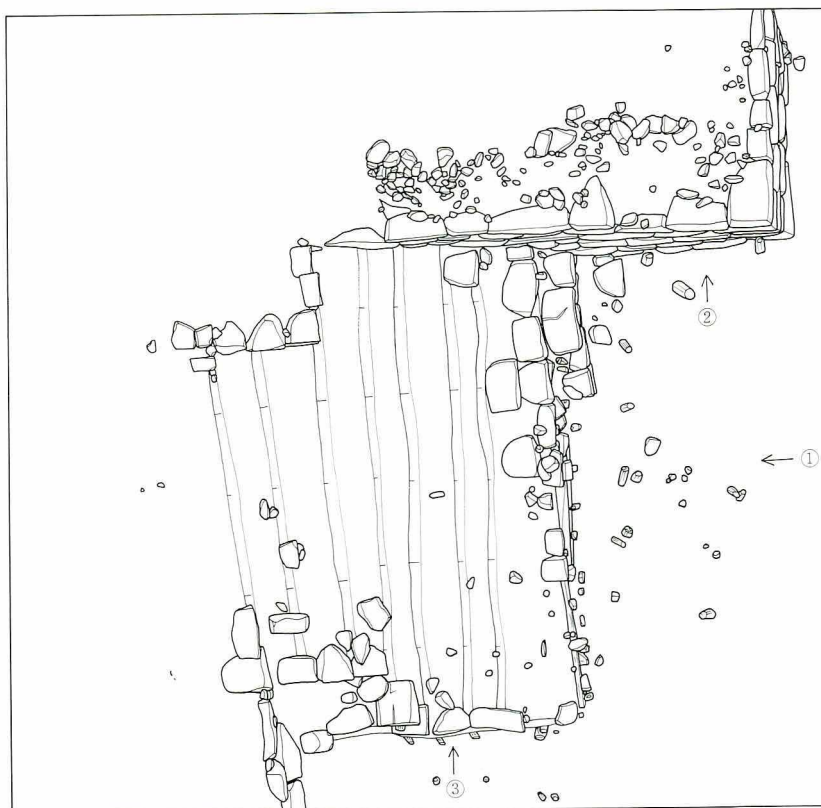
①方向立面



②方向立面



③方向立面



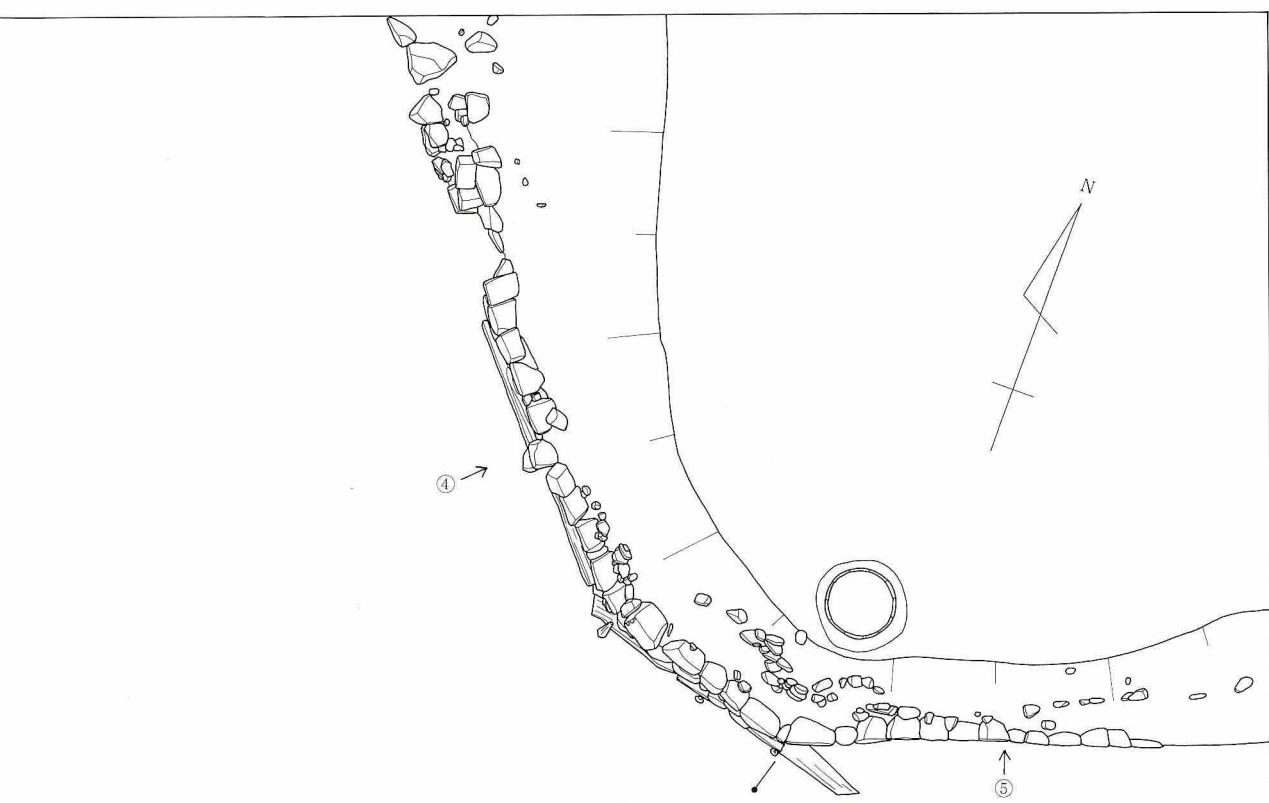
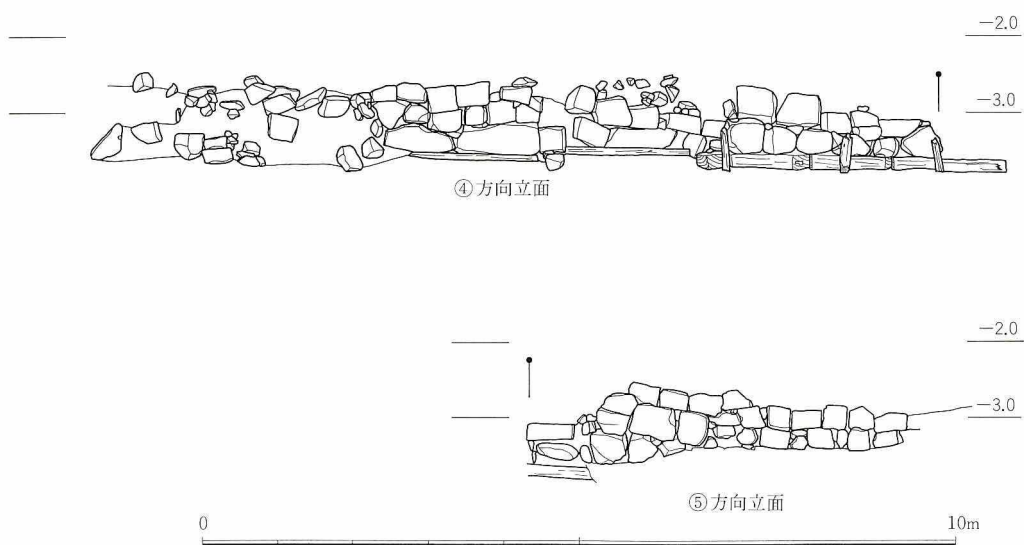


图10 A区石垣实测图



写真10 ヘドロ層から出土した焼物

3) 蔵のようす

E区(写真8・9 図9)

攪乱がひどかったが、西側の礎石列が確認できた。長さ100～120cm、高さ30cm程の切石を3段重ねている。礎石上面の高さはTP+0.8m、下面はTP-0.1mである。蔵の周辺の地表面はTP-0.4mであり、礎石の下端から地表面までの間30cm程は漆喰を塗って固めてい



写真11 船入を埋戻した砂層から出土した焼物

る。蔵の床面の高さは礎石上面の高さとほぼ同じである。図9のアミカケは土を突き固めた床面が残る部分である。礎石列の西端に北から南まで白い塗料が残っていた。これは壁を白く塗った際に流落ちた塗料の痕跡である。

攪乱のため東側の礎石列は残っていなかったが、北東隅を示すと思われる礎石が1つあり、蔵の東西方向の長さは約10mと推定できる。



写真12 簪とナイフ(左10.5cm 中16.5cm 右8.7cm)

4) 船入から出土した遺物

焼物(写真10・11)

船入内に溜ったヘドロ層と船入を埋め戻した砂層から多量の焼物が出土した。明治維新まで機能していた船入に溜ったヘドロと、1879年を下限とする砂層に含まれていたもので時間幅は短く“もの”それ自体に時間差を見い出すことはできない。一方、ヘドロ層から明らかに時期

奥 色 通 み 系 紅 信 と あ る 辰	宝 結 卦 宝 結 卦 宝 結 卦	萬 葉 卦 萬 葉 卦 萬 葉 卦	雷 菱 卦 雷 菱 卦 雷 菱 卦	桔 梗 卦 桔 梗 卦 桔 梗 卦
宝 結 卦 宝 結 卦 宝 結 卦	萬 葉 卦 萬 葉 卦 萬 葉 卦	雷 菱 卦 雷 菱 卦 雷 菱 卦	桔 梗 卦 桔 梗 卦 桔 梗 卦	桔 梗 卦 桔 梗 卦 桔 梗 卦
桐 葉 卦 桐 葉 卦 桐 葉 卦	萬 葉 卦 萬 葉 卦 萬 葉 卦	雷 菱 卦 雷 菱 卦 雷 菱 卦	桔 梗 卦 桔 梗 卦 桔 梗 卦	桔 梗 卦 桔 梗 卦 桔 梗 卦
桐 葉 卦 桐 葉 卦 桐 葉 卦	萬 葉 卦 萬 葉 卦 萬 葉 卦	雷 菱 卦 雷 菱 卦 雷 菱 卦	桔 梗 卦 桔 梗 卦 桔 梗 卦	桔 梗 卦 桔 梗 卦 桔 梗 卦

図11 『浪花色八卦』

が遡るものはほとんどない。このことは、船入に流れ込む土砂やゴミを焼物の形が変化しないような時間幅で浚渫していたことを示しているのであろう。



写真13 木製品

金属製品(写真12)

2点の簪^{かんざし}がヘドロ層から出土した。1点は長さ10.5cm、実用品とは思えない粗末な作りである。花菱の刻印が打たれており、1756(宝暦8)年の『浪花色八卦』(図11)にみえる「花菱卦」の簪であろう。花菱の店の1つには安治川の遊里がある。その後『浪花今八卦』(1773年)の安治川の案内には

「色八卦時代に替らず、やはり船手斗の所。外の客筋まれにて、少しも前にかわらず。」とある。川を伝って広島藩に出入りしていた者が安治川で遊び、この簪を貰い受けたのだろうか。もう1点は、月と飛ぶ鳥を両面にあしらったていねいな作りである。

砂層から出土したナイフは折畳み式のもので、舶来品であろう。

木製品(写真13)

ヘドロの直上、埋め戻しの砂層との境目あたりから、焼物類に混じって木製品も出土した。明らかにヘドロ層内に含まれているものはなかった。このような出土状態から、船入が廃絶する前後に棄てられたか、流れ込んだものであったことが判る。

(人物画)



佐伯郡佐方村×

(ウラ) 亥十一月十一×



×調郡向東村□作助

(ウラ) 辰十一月



高田郡長屋村×

(ウラ) □月□□×



玄米四斗入

(ウラ) 廣□□□五□長□□



七羅郡重永村国藏

(ウラ) 辰十月廿三日



升四升
米和介



沼田郡長楽寺村庄藏

(ウラ) 酉□□



佐伯郡白砂村中作藏



高田郡土師村嘉助

(ウエ) □ □



天保五年

(ウエ) 宮本□次郎
木村久次



御調郡木梨村瀬□殿□郎



勝右衛門新□

(ウエ) 井一



アキ郡東□村□□×



御調郡×



高宮郡可部村□×

(ウエ) 申十月五×



向西村□右衛門



伯州河村郡湯村幸□

(ウエ) 一〇橋津御□



世羅郡本×

(ウエ) □ ×



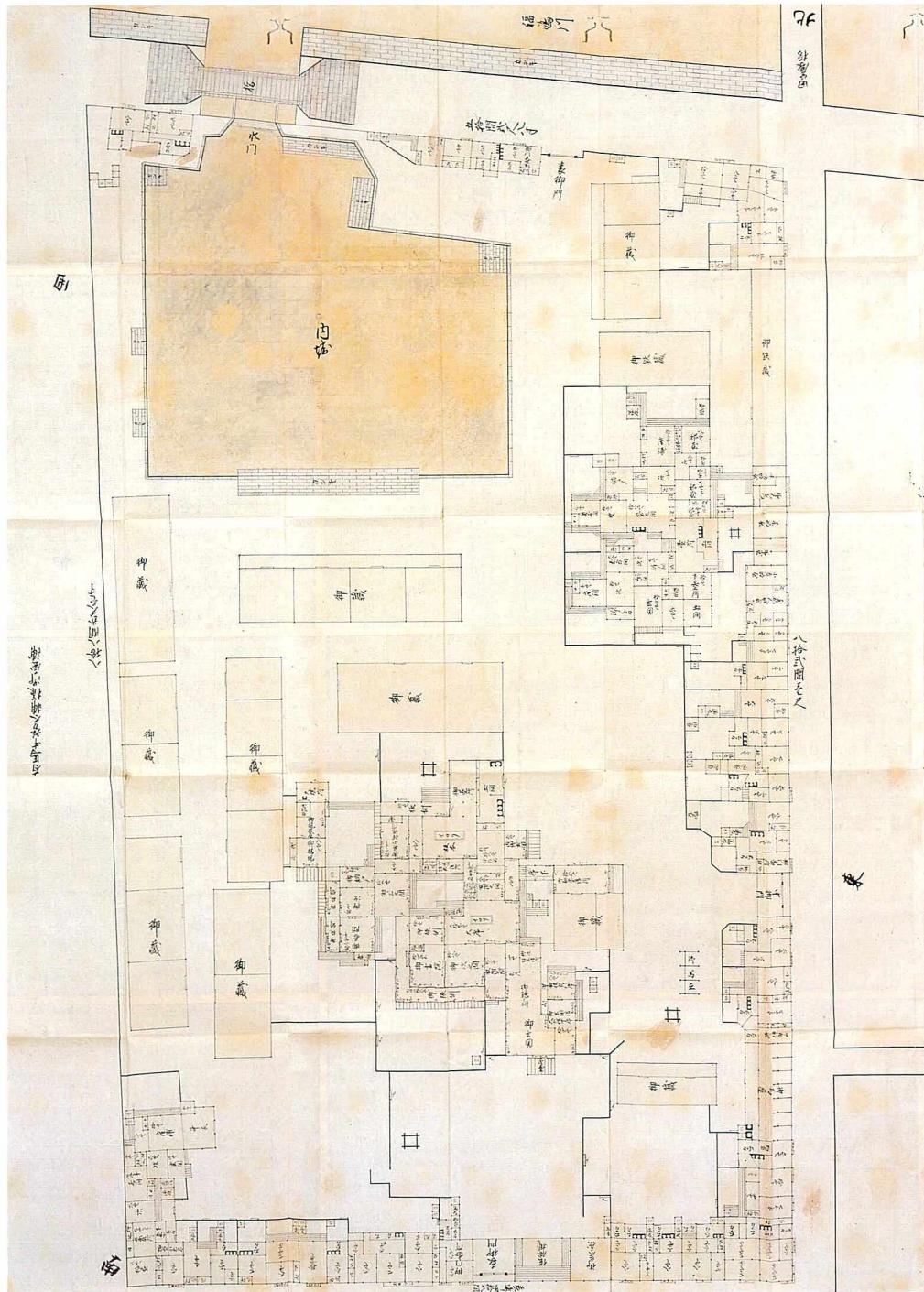


写真16 大坂中ノ島御屋敷絵図(広島市立中央図書館蔵)

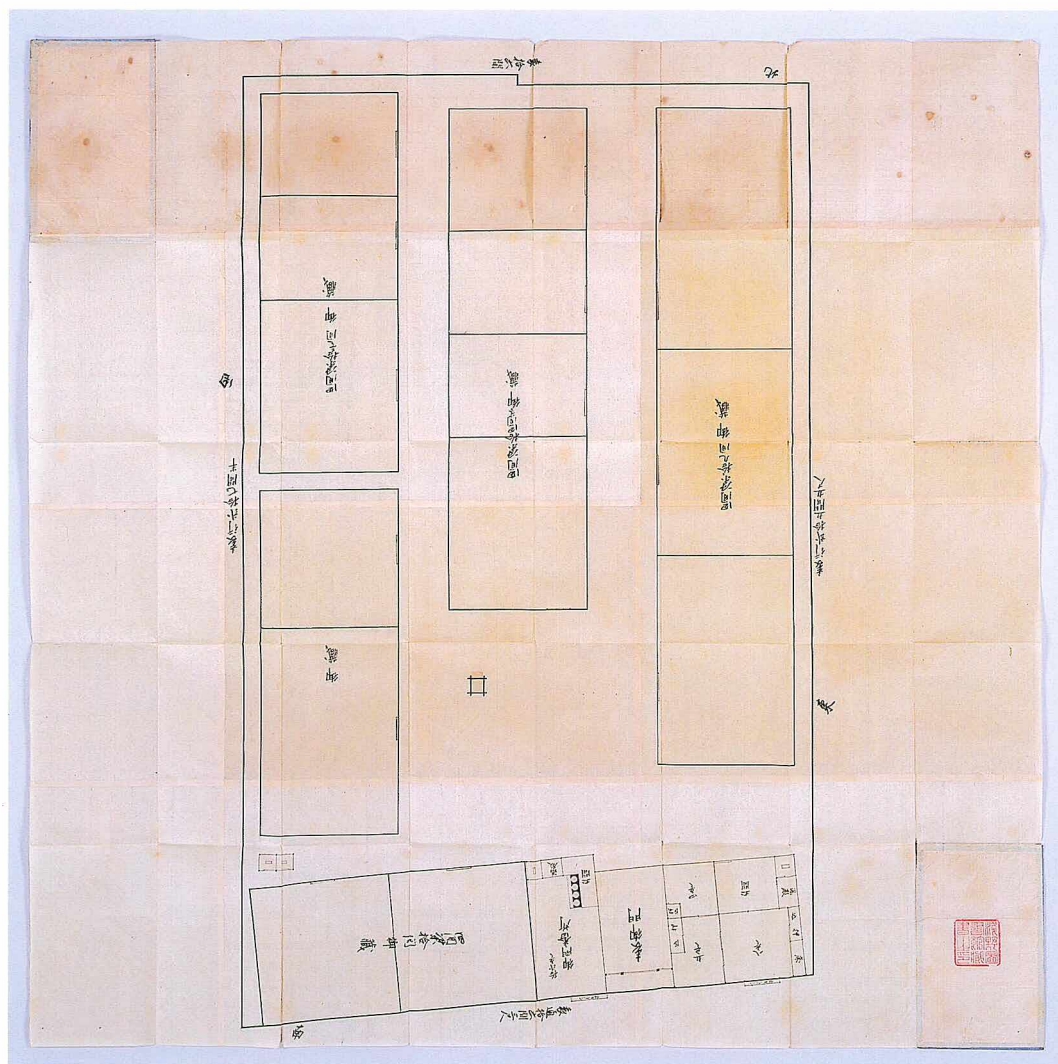


写真17 大坂浜之御屋鋪絵図(広島市立中央図書館蔵)

木簡(写真14・15)

300点近い木簡が出土した。広島藩の国元から蔵屋敷に運び込まれた荷に付けられていた札であろう。当然のことながら現在の広島県内の地名が多い。今のところ「米」「玄米」と書かれたものは2点しか確認できていないが、「十月」「十一月」と記されたものが何点かある。10月・11月以外のものはないので、10月・11月に収穫された米に付けられていた札であろう。



写真18 試掘壕東壁



写真19 A区西岸(東から)

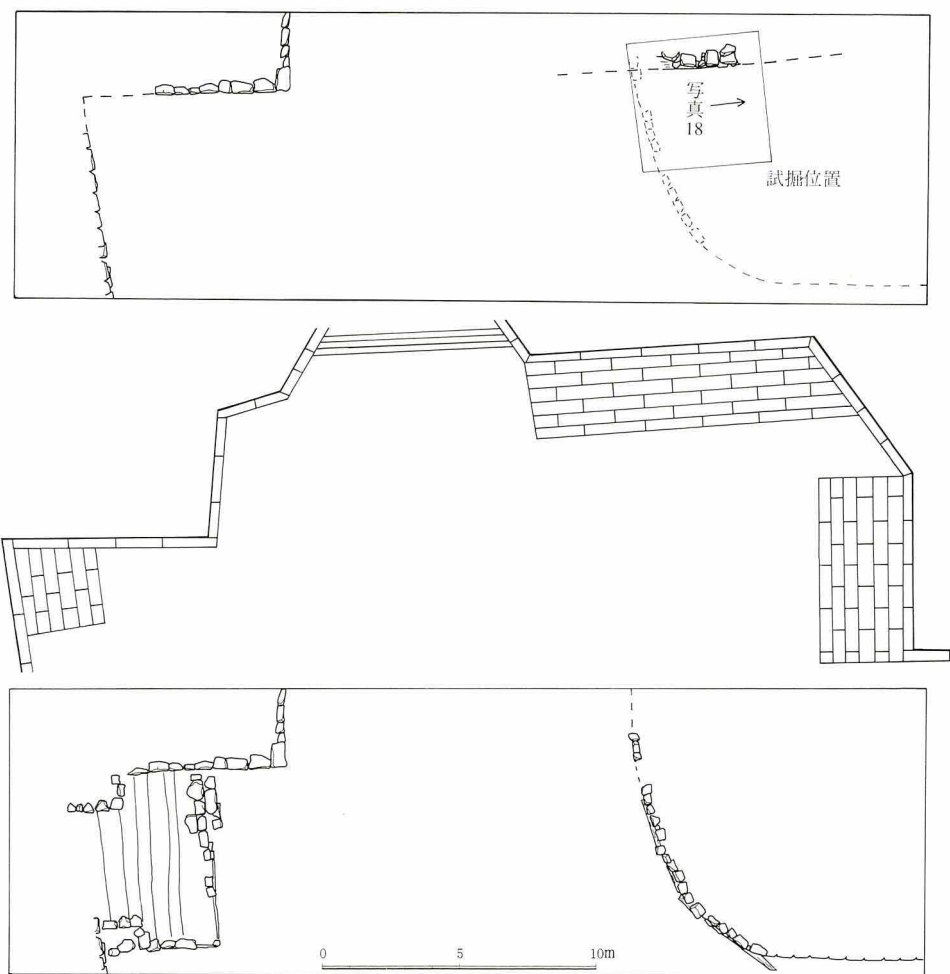


図12 船入の入口部分変遷図

3 新出の絵図と船入の変遷

これまでに広島藩蔵屋敷の絵図としては図2に示したもののほかに「常安町旧広島藩邸図」が公刊されている[鈴木直二1938]。写真16に示したものは広島市立中央図書館浅野文庫に架蔵される「大坂中ノ島御屋敷絵図」である[広島市1969]。折本で、広げると約97cmの正方形の絵図である。残念ながら絵図自体には製作年を示す記述はない。

鳥居の表現がなく厳島神社勧請以前の蔵屋敷と思われる。西隣りの久留米藩蔵屋敷が「有馬中務太輔様御屋鋪」と記されている。今のところ厳島神社の勧請時期は判らないが、久留米藩主有馬氏が中務太輔の官名を受けるのは頼隆(1783年没)と、次代の頼貴(1826年没)である。したがって、18世紀末から19世紀初めのようなすを描いているものと思われる。

一方、試掘調査で東岸石垣の下層に東西方向の石垣が確認されている。この石垣は壊されていて水成の土砂によって埋没しているので(写真18)、これよりも北側に拡張された石垣が存在していることが予測されていた。したがって東岸のみに限定するなら、

東西方向の石垣(古)→北へ拡張された未検出の石垣→今回見つかった石垣(新)
という3時期の変遷がたどれる。最も古い時期の東西方向の石垣の裏込めの中から、18世紀前半ごろの焼物が見つかったので、この石垣の時期を推定する材料となる。西岸に目を転じると、階段はある時期に新設されたものであることが明らかである(写真19)。階段の下層には、階段設置以前の船入に溜ったヘドロが堆積しており、この上に盛土をして階段をつくっている(図5)。

これらの発掘調査の知見と、新出の絵図とを重ね合わせると、図12に示したような3時期の変遷がおさえられる。18世紀前半、西岸には階段はない。東岸は東西方向の石垣であり、船入りの北辺はほぼ一直線である。18世紀末～19世紀初めに西岸に階段が設置される。東岸は北へ拡張され、「大坂中ノ島御屋敷絵図」に描かれている形となる。19世紀中ごろに今回発掘された船入の形となる。西岸にはあまり変化はなく、東岸は円弧を描くように大きく改変される。1866年の絵図である。

写真17「大坂浜之御屋敷絵図」の製作年は不明だが、1658(万治元)年に売払われた江戸堀屋敷[広島県1981]の絵図に違いない。

4 まとめにかえて

今回の調査によって幕末まで機能していた蔵屋敷の遺構が良好な状態で遺存していることが明らかになった。また、新出の絵図と発掘成果を重ね合わせることによって江戸時代中期以降、3時期の船入の変遷も明らかにできた。

大坂蔵屋敷の発掘調査は佐賀藩蔵屋敷の船入[大阪市文化財協会1991]に続き2例目である。現在の大阪の繁栄を準備した近世大坂の物証は、巨大化する都市に呑み込まれ、消え去ろうとしている。過去を正確に認識することは、豊かな未来をつくる材料となる。今後地域史を目に見える形で明らかにしていくために、中之島と周辺の調査が必要になっていくことであろう。

〈参考文献〉

- 鈴木直二1938：『徳川時代の米穀配給組織』 巖松堂書店
佐古慶三1964：「広島蔵と鴻池」『広島商大論集』5-1 広島商科大学商経学会
宮本又次1967：『大阪の研究』3 清文堂出版
広島市 1969：『広島市立浅野図書館蔵郷土資料目録』
宮本又次1970：『大阪の研究』4 清文堂出版
岡本良一1976：『大坂』江戸時代図誌3 筑摩書房
広島県 1981：『広島県史』近世1
宮本又次1983：『久留米藩大阪蔵屋敷絵図』 尾崎雅一（非売品）
伊勢戸佐一郎・谷直樹1988：「佐賀藩大坂蔵屋敷の建築と年中行事」『大阪の歴史』25 大阪市史編纂所
森 泰博1988：「府内藩大坂蔵屋敷の業務」『大阪の歴史』25 大阪市史編纂所
作道洋太郎1989：「蔵屋敷」『新修大阪市史』3
藤本 篤1989：「天下の台所」『まちに住まう一大阪都市住宅史』 平凡社
森 泰博1989：「鳥取藩大坂蔵屋敷の成立」『商学論究』37-1～4 関西学院大学商学研究会
渡辺忠司1990：「天下の台所」『図説 大阪府の歴史』 河出書房新社
大阪市文化財協会1991：『旧佐賀藩大坂蔵屋敷船入遺構調査報告』
渡辺忠司1993：『町人の都 大坂物語』 中公新書
脇田 修1994：『近世大坂の経済と文化』 人文書院
塚田 孝1996：『近世の都市社会史』 青木書店

広島藩大坂蔵屋敷跡

—大阪市北区中之島4丁目における発掘調査—

ISBN 4-900687-18-9

1997年3月31日 発行

編集・発行 財団法人 大阪市文化財協会

〒540 大阪市中央区法円坂1-1-35

TEL 06-943-6833

FAX 06-920-2272

印刷・製本 岡村印刷工業株式会社

〒635-01 奈良県高市郡高取町車木215

TEL 07456-2-2701

